

捻枝による極早生温州「肥のあかり」の日焼け果発生軽減効果

極早生温州「肥のあかり」では、着果している立ち枝を7月に捻枝すると、日焼け果の発生が減少し、その程度も軽くなる。また、7月中旬以降では、処理時期が早い方ほど効果が高い。

農業研究センター果樹研究所常緑果樹研究室 (担当者: 川端義実)

研究のねらい

気候温暖化に伴う夏秋期の高温や強日射、少雨等により、カンキツの日焼け果が多発生する年が増加しており、特に極早生温州で発生が多い。極早生温州「肥のあかり」の日焼け果は、立ち枝の果実に発生しやすく、立ち枝が多い樹では、直射日光が当たる果実が多いため、日焼け果も多く発生している。そこで、着果している立ち枝の捻枝による日焼け果の発生軽減技術を確立する。

研究の成果

1. 捻枝は、着果している2～3年生の立った側枝の基部付近を片手で握り、その先をもう片方の手で折れないように90～180度捻り倒して、果実に直射日光が当たらないようにする。
2. 7月に捻枝をすると、無処理枝より日焼け果の発生が少なく、発生してもその程度は軽くなるが、8月中旬では効果が劣る(表1)。
3. 捻枝の時期は、7月の早い時期ほど日焼け果の発生が少なく、その程度も軽い(表1)。
4. 7～8月では、捻枝時期による果実肥大への影響は小さい(図1、図2)。また、捻枝により果実品質はやや向上する(表2)。

普及上の留意点

1. 葉数が少ない枝では、捻枝しても日焼け果の抑制効果は劣る。
2. 枝が硬い場合や捻り過ぎにより、枝が折れて落葉・枯死する場合がある。
3. 7月上旬から白黒ポリマルチをした9～10年生の「肥のあかり」での試験結果である。

表1 捻枝時期が日焼け果発生に及ぼす影響

年次	処理区	日焼け果の程度別発生割合				日焼け果発生率	日焼け度
		無	軽	中	甚		
		%	%	%	%	%	
2012	7月下旬捻枝	90	0	10	0	10	7
	8月中旬捻枝	75	8	17	0	25	14
	無処理	78	11	11	0	22	11
2013	7月中旬捻枝	69	21	0	10	31	9
	7月下旬捻枝	59	15	8	18	41	28
	無処理	45	23	16	16	55	33

注1) 処理枝(2~3年生で4~8個着果している立ち枝)の日焼け果発生割合と程度を調査

2) 2012年は7月31日、8月17日に捻枝し、9月20日に調査、2013年は7月17日、7月31日に捻枝し、9月24日調査

3) 日焼け度 = $\frac{\text{軽の果数} \times 1 + \text{中の果数} \times 2 + \text{甚の果数} \times 3}{\text{総着果数} \times 3} \times 100$

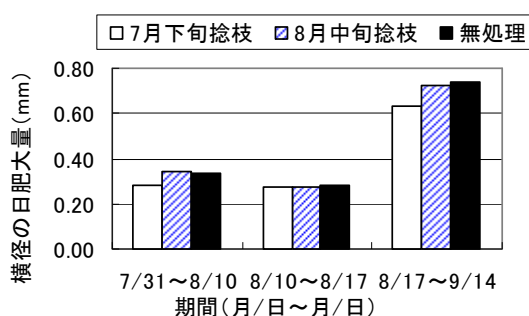


図1 捻枝時期が果実の日肥大量に及ぼす影響 (2012年)

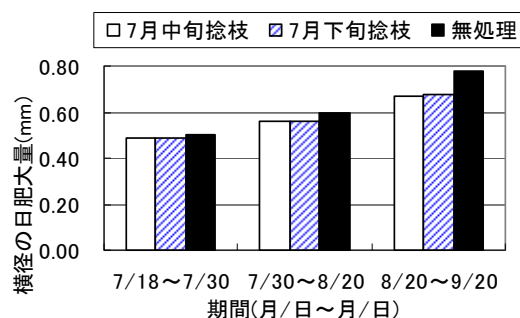


図2 捻枝時期が果実の日肥大量に及ぼす影響 (2013年)

表2 捻枝時期別の捻枝枝の果実品質

年次	処理区	平均果重	糖度 (Brix)	クエン酸濃度	果実着色
2012	7月下旬捻枝	74.2	12.0	0.96	2.5
	8月中旬捻枝	76.5	11.3	1.01	2.3
	無処理	77.8	11.2	1.01	1.6
2013	7月中旬捻枝	84.6	10.7	0.77	1.1
	7月下旬捻枝	80.6	10.6	0.79	1.3
	無処理	87.5	10.3	0.83	1.3

注1) 処理枝(2~3年生で4~8個着果している立ち枝)の果実を分析

2) 2012年9月20日収穫・調査、2013年9月24日収穫・調査